

センタージャーナル

■発行人／荒山 淳

■発行所／真宗大谷派名古屋教区教化センター

〒460-0016
名古屋市中区橘二丁目8番55号
TEL (052) 323-3686
FAX (052) 332-0900



『親鸞聖人絵伝』（名古屋別院蔵）に伝えられる吉水入室の場面

(写真の無断転用はご遠慮ください)

立つ！
いのちの大地に
聞く！
いのちの叫びを

真実の学びから、
今を生きる「人間」としての
責任を明らかにし、
ともにその使命を生きる者となる。

もくじ

- ・ 聖典研修 第5回
親鸞聖人の御生涯に聞く ②・③
六角堂参籠
- ・ 大谷派の近現代史
第30回平和展の開催に
向けて ④・⑤
- ・ 現代社会と真宗教化
わたしの中のカルト ⑥・⑦
- ・ INFORMATION ⑧

◆イラストカット集(※寺報などにご利用ください)

門徒と称せらるるもの ―法中―

今から十数年前、あるお寺の御遠忌法要に参勤した時のことである。本堂脇玄関に設置された「法中入口」から入る私に、礼服を来た受付係が「ご苦勞様です」と頭を下げた。しかし、一人の同行が私に続いて入ろうとした時、「ここは『法中入口』ですから、僧侶の方しか入れません」と、係が制止した。すると、その同行は「何を言うか！僧侶だけが法の中か？それなら俺は仏法の外か！」と、険しい表情で怒号した。この言葉が、今も私の耳底に留む。

法要において眼にする「法中」の貼り紙。それは僧侶である私にとっては控室に辿り着くための大事な指示書だが、同行にとつては「法の外」と簡ばれ、隔てられる言葉となることを初めて教えられた。同時に「僧侶」と「門徒」を無自覚に使い分け、簡び棄てていた自身の姿が浮き彫りとなった。

宗祖が吉水に入室されたとき、今まですべては全く異なる人の繋がりを本師である法然上人の姿を通して目の当りにされたことを、

源空光明はなたしめ

門徒につねにみせしめき

賢哲愚夫もえらばれず

豪貴鄙賤もへだてなし

〔高僧和讃〕 聖典四九九頁

と、讃述しておられる。

宗祖も「門徒（一門のともがら）」の一人として、つねに法然上人の生き方を観察しておられたのであろう。いのちを繋ぐため、自らの意志とは裏腹に、たとえ悪事とされていることでも行わなければならぬ悲しさを抱えた人々に寄り添い、人として生まれた悲しみの声に耳を傾けられた上人。それも「えらばれず」「へだてなし」に。宗祖は、その生き方に念仏成仏道の具体的な姿を目の当たりにされたのだろう。

しかしそれは、取りも直さず「門徒教輩」として世の中から排除され抹殺されゆく念仏集団でもあったと、宗祖は『教行信証後序』で述懐しておられる。

翻って、真宗大谷派という組織、その中に身を置く私自身はどうか。人を仕分けていくような意味を含んで「門徒」という言葉を使っているはいないか。奇しくも来春、二〇一一年の御正當から八年の歳月を経て、真宗本廟春の法要において法然上人八百回忌が厳修される。出遇った一人を、この身の都合で簡び棄てることなく、隔てることなく身を寄り添わせ、耳を傾けていくことのみ、真の「法中」と呼び合える僧伽となることを、今一度上人の姿に身を端さねばならぬことである。

(主幹 荒山 淳)

聖典研修

2018年4月23日

親鸞聖人の御生涯に聞く

第五回

六角堂参籠

講師 東館 紹見氏 (大谷大学教授)



聖徳太子はどのような人物か？

親鸞聖人の御生涯において、大切な数多くの出あいがあったことと思います。その中でも特に、法然上人との出あい、そして今回お話しする六角堂における聖徳太子との出あいは、聖人の人生において要となるものです。

最初に、聖徳太子はどのような方だったのか。その特徴として、日本で初めて大乘仏教、すなわち一乗の教えを根付かせようとした方であることが挙げられます。日本に仏教が伝わったのは五〇〇年代中頃といわれますが、伝来してから五十年ほどの間で、太子は仏教に関わる様々なことをなさっています。

例えば『十七条憲法』の内容は解釈の仕方により様々な問題を見出すことができますが、その第二条に、

篤く三宝を敬え。三宝とは仏・法・僧なり。(中略) 其れ三宝に帰らまつらば、何をもちてか枉れるを直さん。

(『聖典』九六三頁)

とあることから、太子が大乘仏教を中心とした政治によって社会を作ろうとされていたことが窺えます。また、太子(及びその周りの者)は『法華義疏』『勝鬘

經義疏』『維摩經義疏』という經典の注釈書をお書きになったとされています。

『法華經』はまさに一乗を説く經典、そして『勝鬘經』は在家の女性が、『維摩經』は在家の男性が大乘を説く經典です。つまり、太子在世の時点で、男女、出家・在家の別を超えて歩むべき教えが一乗(大乘)なのだと思えられていたという事です。

聖徳太子は僧侶ではなく一人の政治家として、在俗生活のまま教えを聞いていかれました。貴族として生まれた親鸞聖人は、政治や社会、そこに大きく関わっている仏法に対して様々なことを感じ取っておられたことでしょう。そのような状況の中、聖人は太子の歩みに、日本における大乘仏教というものを聞いていかれたのだと思います。それは単純な思慕などではなかつたはずで

六角堂の背景

親鸞聖人が参籠された六角堂は聖徳太子が建立されたと伝えられており、早い時期から天台宗に所属していました。そして、六角堂が天台宗における太子信仰の拠点であったことは重要だと考え

ます。

六角堂の名が記録に見られるようになるのは十一世紀以降で、貴族の日記などに「六角堂にお参りした」という趣旨の記録が出てきます。注目したいのは当時、南都北嶺の拠点寺院を通じ、日本仏教を本格的に展開させた人物としての聖徳太子に対する信仰が盛んに説かれ始めていたことです。そして、その背景には太子の本地である観音菩薩への信仰が存在しました。つまり、太子は観音菩薩の化身として皆の前に現れ、共に歩んでくださったのだと、観音信仰と太子信仰が一体化した形で世に広まっていたのです。

以前にもお話したことです。当時律令体制がすでに崩れ、荘園領主が人々を支配するという時代社会でした。そのように社会の仕組みが変化する中、比叡山に所属する仏教者などは民衆の中へ出て教えを説く際に、菩薩道を重要視したのです。自分一人で先に覚りの道を行くのではなく、皆と共に歩んでいくのが菩薩です。その中でも、世の悲しみの声を聞いて皆と共に歩んでくださる、本当に慈悲深い大乘仏教の精神を表した存在が観音菩薩だといわれ、天台宗では『法華經』『觀世音菩薩普門品』を通じて信仰されてきました。その動きが活発化する時期と、史料上に六角堂の名が出てくる時期とは、ほぼ重なるのです。

このように、親鸞聖人に先立って、観音信仰、太子信仰は顕密仏教において広く伝えられていました。ですから、突如

として聖人が太子信仰や六角堂に思いを馳せられたのではなく、顕密仏教による民衆支配と密接に関わる中で、すでにそのような信仰が人々に広められていたのです。そのことを考慮したうえで、聖人の真意を窺う必要があると考えます。

如意輪観音とは？

天台宗における太子信仰の拠点であった六角堂ですが、その本尊である如意輪観音も、親鸞聖人の六角堂参籠を考えるうえで重要なものです。当時、如意輪観音は、聖徳太子の本地として信仰されていた法隆寺・夢殿の本尊救世観音と団体であるという説が、天台宗によって説かれていました。注目したいのは、如意輪観音がどのような存在として受け止められていたのかということです。

聖人より少し後の時代に成立した、天台宗における密教系の教学や修法などをまとめた『阿婆縛抄』という書物の中に、如意輪観音について解説された部分があります。それによれば、如意輪観音は「浄・不浄、出家・在家、持戒・破戒の別を問わず、人々のあらゆる願いを成就する存在」とされています。つまり、人々のあり方の別を問わず、あらゆる願いを叶えてくださる、どのような者にも寄り添う存在として信仰されていたのです。

では、あり方の別を問わない、人々のあらゆる願いとは何でしょうか。十二世紀末から十三世紀初めにかけて成立し

た、真言密教の修法関係の百科全書である『覚禪鈔』の中に、如意輪観音の功德について書かれた部分があります。そこには「盗賊などの難から逃れたい」「雨が降ってほしい」「女性に好かれたい」「子どもを授かりたい」といった人々の日常生活における切実な願いに込められているという形で功德が書かれています。

これらの願いは自己中心的なものではありませんが、人々の生活を左右する大きな問題だということを忘れてはならないでしょう。ましてや、当時の人々の生活を考えれば、自分の生に関わる本当に切実な事柄だったのです。それらの願いにそのまま込めることは、仏教における本当の意味での利益とはいえないでしょう。しかし、そういう願いに込めるといふ形ではありますが、当時は仏教が民衆の方を向いた時代であったともいえません。その際に脚光を浴びたのが如意輪観音であったということ、まず押さえておきたいと思えます。

この『覚禪鈔』には、如意輪観音の功德として「本尊 王の玉女に交するの事」と説かれる部分があります。大谷大学の名誉教授であられる名畑崇先生は、ここで示される内容が「六角夢想の偈」の元になったと教えてくださっています。

若し邪見の心を発し、姪欲熾盛にして、世に墮落すべきに、如意輪、我、王の玉女と成り、其の人の親しき妻妾として、共に愛を生じ、一期の生の間、莊嚴すること福貴を以ってし、

無辺の善事を造らしめ、西方極樂淨土に仏道を成ぜしめん。

「修行者が自分中心の心をおこして性欲が盛んになり、仏教者として墮落しうになったならば、私（如意輪）が玉女となり、妻として共に愛を生じましょう。そして仏道修行の墮落にならない善い行いをさせ、最終的には極樂淨土に往生させましょう」という内容です。つまり、如意輪観音は、修行者が女性と通ずることも、他の様々な自己中心的欲望の場合と同じ様に、仏道からの墮落ではないものにしてあげるから大丈夫だと、欲望の満足を正当化してくれる存在として認識されているのです。

真宗における結婚も、ことによっては同様に受け取られる危険性があると思えます。つまり「観音菩薩が認めたので」、あるいは「親鸞聖人が結婚されているので墮落ではない」と、自分中心の物差しや欲望を正当化するために利用してしまふ恐れがあるのです。

傷つけられたとしても、共に歩む

大切なのは、親鸞聖人が参籠中九十五日目の暁に受けた夢告と、『覚禪鈔』で示された内容とが異なるということ、す。

行者、宿報によって設けられた女犯すとも、我、玉女の身となって犯せられん。一生の間、能く莊嚴して、臨終に引導して極樂に生ぜしむ。

これは『御伝鈔』（『聖典』七二五頁）や真上人筆「親鸞夢記」や専修寺蔵『三夢記』で示される偈を訓読したものです。『覚禪鈔』との一番の違いは、「犯」の押さえ方です。例えば、お酒を飲む、嘘をつくなどして戒律を破った際は「犯戒」すなわち「戒律を犯す」と表現されます。「女犯」も同様であり、戒律を守るべき修行者の立場から、修行者自身の問題として「犯」が問われるのです。つまり「女犯」は「自分が墮落するかどうか」という立場から「悪として避けるべきもの」とされており、如意輪観音はそれを正当化してくれる存在と考えられていたのです。

しかし、親鸞聖人の夢告では「犯せられん（被犯）」すなわち「私は傷つけられるであります」と、傷つけられた側から戒律に言及しています。このような立場から戒律を解釈する視点は、他の仏教者にはほぼ見られないものです。「あなたが他者と共に歩むということは、その存在を傷つけるといふこと」と、如意輪観音が聖人に告げておられるのです。

そしてもう一つ大切なのは「宿報」という言葉です。「宿報」とは、人間である限り避けることができない問題ということでしょう。ですから「女犯」とは、たまたま邪な心を起こして墮落するということの問題ではなく、すべての人間にとって大切な問題ということであり、女性と共に歩みたいならば、家庭生活の中で共に歩みたいならば、ということでしょう。

う。「あなたから傷つけられる（被犯）」とがあつたとしても、あなたと一生涯共に歩みます」と告げる中、如意輪観音は聖人に「共に歩む」という一乗の内容を示してくださっているのだと考えます。皆と共に歩むということは、普遍的な罪の問題を知らされ続けるといふことを外しては成り立ち難いものです。このよきな夢告を受けた聖人の一乗の仏道は、すでに自力聖道というあり方とは異なるものでしょう。そして『無量寿経』『観無量寿経』を見ますと、観音菩薩は阿弥陀如来の光、すなわち自己中心的な悩みを破るはたらきを伝える存在として登場します。

これらを総合的に考えますと、親鸞聖人は六角堂に参籠される時点で、法然上人の説かれる本願念仏の教えについて、すでに相当深く理解されておられたのだと思えます。ですから、修行に挫折して道に迷って、あるいは個人的な性の悩みが原因となって六角堂に行かれたのではないということでしょう。

聖人の中で明確となっていた一乗という仏道を実践していくうえで、在俗生活をどう受け止めていくのか。そして、女性を含めた全ての人とのように共に歩んでいくのか。比叡山を出る前に、それらの事柄の真意を尋ねに聖徳太子のもとへ行かれたのだと考えます。

大谷派の
近現代史

第30回平和展の開催に向けて

研究員 新野和暢にいの かずのぶ

はじめに

来年、三月の春季彼岸会に合わせて、第30回平和展を「仏教の社会活動ーアジア太平洋戦争と大谷派ー」と題して開催する。今回は、一九四一（昭和十六）年十二月八日から敗戦までの時期に焦点を絞り、大谷派がどの様に戦争中の社会と関わったのかという課題を考える「平和展」の視点を紹介したい。

侵略か自衛か

「日米開戦」として知られているあの日、日本はハワイ（オアフ島）の真珠湾にあったアメリカの軍施設を爆撃した。この戦争を当時の政府は「大東亜戦争」と称した。欧米諸国のアジアに対する植民地支配を解放し「大東亜共栄圏」を形成するという理念を提示して、戦争への理解を国民や世界に訴えた。「アジア解放」という戦争する「正義」を示したのである。では、実際はどうなのだろう。それを見極める第一歩に、歴史の検証が必要になってくるのである。戦後の歴史研究は「正義」よりも「侵略」であった実体を明らかにした。一方で、この「真珠湾攻撃」は宣戦布告を経ない「だまし討ち」だったとか、石油等の燃料輸入の制限など経済的な締め付けを起因とする「やむを得ない」「自衛の為の戦争」であったなどの諸説が聞かれる。とりわけ近年は感情論

が先行し、「自衛」という側面が強調されながら「侵略」という事実が覆い隠されようとしているようにも見受けられる。

しかし、一部の情報のみ頼ったり、事実を無かったことにするならば、歴史事実から遠のくばかりである。例えば、真珠湾攻撃よりも先んじてマレー半島（英国領）に上陸する軍事作戦に着手している。それに、「アジア解放論」は「大東亜戦争」という言葉の意味から見ても間違っている。その名称は「日米開戦」より前から始まっていた日中戦争（一九三七年七月七日）にまで遡って「大東亜戦争」に含められた。日中戦争は、北京郊外の盧溝橋という場所で一九三七年七月七日に起きた戦闘行為が発端である。瞬く間に南京や重慶など大陸全土へと戦禍が広がっていったが、その終息の兆しすら見えないまま、南方へと進軍し戦禍が太平洋地域まで拡がっていったのである。この同じアジアの国である中国との戦争までも「アジア解放」という戦争肯定論に含める歴史観には無理がある。

継続性を重視する歴史観

アメリカや英国をはじめとする連合国軍は、「満洲事変」（一九三一年九月十八日）と、それに起因する「満洲国」の建国、そして日中戦争に関わる日本の侵略行為を批判していた。その延長線上に

真珠湾攻撃がある。敗戦後、占領軍（GHQ）が「大東亜戦争」を使用禁止用語にしたのは、「侵略戦争」を肯定的に捉える意味が含まれる呼び名であったからである。それゆえ、歴史研究家の多くは、「満洲事変」から敗戦までの期間を十五年戦争期（一九三一年九月十八日〜一九四五年八月十五日）と呼んでいる。十五年間もの間、常に交戦・戦闘状態にあった訳ではないが、アジア太平洋戦争（第二次世界大戦）に至る歴史の連続性を重視した歴史観である。

天皇の為に

近年の「平和展」では、この十五年戦争を三つの時期に区切って検証を進めてきた。最終期にあたる「アジア太平洋戦争期」は、大谷派が総力を挙げて戦争協力を行った時期である。中国での戦争と併行して南太平洋へと戦地が拡大するのに伴い、大谷派の活動も活発になり、一九四一（昭和十六）年十二月二十五日には本山・東本願寺の山門前に「皇威宣揚」「生死超脱」「挺身殉国」の巨大看板が設置された。皇（天皇）の威力を世界に知らしめる（宣揚）ために、生死の問題にとらわれないことなく（生死超脱）、自ら進



んで国の為に命を投げだそう（挺身殉国）、という意味である。

この天皇中心主義は宗門内で浸透しており、例えば暁烏敏は戦況が悪化し名古屋や東京が初めて空襲を受けた事について、一九四二（昭和十八）年四月十八日、次のように述べている。

敵機のおうなりを お上のお耳にお入れ申しただけでも恐懼に堪へない軍艦の二艘破壊したつて何でもありません。お上のみむねをしばらくでも、お痛め申し上げたことは死に値するなやみだ（『暁烏敏全集 第二十四巻』四四二頁）

と、空爆で失った命を心配することなく、いの一番に天皇（お上）のことを優先するような思想を公言するようになっていた。そして、宗議会では大谷瑩潤宗務総長が大谷派を「皇道真宗」と名乗り、名実ともに皇道を実践する組織となった。天皇を絶対視するあり方を持ちながら、海外開教は南方へと拡がり、戦艦を国に寄附する為の募金活動「建艦翼賛運動」を展開した。なりふりかまわぬ、まさに総力



『真宗』1943（昭和18）年1月号

を挙げて戦争協力を行ったのである。
このように戦争協力の頂点に至った事実を第30回平和展で明らかにする予定である。

反戦僧侶の発掘

これまで教化センターが行ってきた「平和展」の歩みは、こうした歴史的事実の積み上げに基づいている。「平和展は過去の話を持ち出してばかり」といった誤解を受けることがあるが、「平和展」の目的はそこにはない。確かに、過去を検証していくと、戦争協力という社会参画の事実が次々に浮かび上がり、目を覆いたくなるような事実を断罪する機運が生まれてくる錯覚に陥ることもある。しかし、「平和展」は過去に今の自分を学ぶことを目的としている。過去の事実を正しく知り、現代に活かす必要がある。

その成果の一つが「反戦僧侶」の発掘であるといっても過言ではない。今ではよく知られるようになった竹中彰元は、日中戦争にあたって、

此の度の事変に就て他人は如何考へるか知らぬが自分は侵略の様に考へる。徒らに彼我の生命を奪ひ莫大な予算を費ひ人馬の命を奪うことは大乗的立場から見ても宜しくない、戦争は最大な罪悪だ。

と述べたことを理由に逮捕され、大谷派からも処分を受けている。日本政府が「聖戦」と呼んで「正義」を語るのと真逆の「侵略」と見抜き、仏教の視点から問題を提起している。しかも彰元は、こうした発言を同じ僧侶仲間との会話であっても憚らなかつた。大多数の僧侶が戦争肯定をしていた時であっても、である。戦争協力した

僧侶は数え切れないが、「反戦僧侶」は数えるほどしかないのである。

そして、彼のように反戦言動をしたもう一人の大谷派僧侶に植木徹誠がいる。一九六〇年代に一世を風靡した「スーダラ節」を歌った植木等の父親としての顔が有名であるが、彼は被差別部落の解放運動に尽力した人物である。日中戦争について、

日本は東洋平和の為の戦争で、領土的野心は無いと云ふて居るが、帝国主義侵略であることは間違ひない。といった言動を行い、四年近く投獄されている。

彼らの発言は当時の大勢と真逆であり、批判され抹殺された。しかし、「平和展」ではかねてより、歴史事実の一つの視点として「反戦僧侶」を取り上げてきた。そして彼らの業績を振り返り、現代的意義を考えるシンポジウム「竹中彰元と植木徹誠」が十一月三十日に行われた。

シンポジウム

シンポジウムは、彰元が住職を勤めた明泉寺（岐阜県垂井町）の現住職・竹中眞昭氏、徹誠が僧籍を置いていた西光寺（三重県伊勢市）の現住職・小幡智博氏、そして大東仁氏（平和展スタッフ）が登壇し、反戦僧侶としての現代的意味を考えた。

シンポジウムに先立ち、大東氏が「日中戦争と反戦僧侶―竹中彰元と植木徹誠―」をテーマに講演した。彰元、徹誠両氏に共通する反戦言動の特徴は、戦場分析などを通じて侵略戦争であることを見抜いて言及したことであり、その反戦思想が真宗僧侶の立場からなされたものであることを明らかにした。その上で、日露戦

争に抗った高木顕明による反戦言動を紹介し、彼らの言動に「なるほど」と納得して終わるのではなく、次に繋がることを各人それぞれが考えることが平和に繋がるのではないかという問題提起を行った。

彰元に学ぶ

二〇〇九（平成二十一）年十月十九日、明泉寺にて「復権顕彰大会」が開催され、彰元への処分取り消し声明が本山から出された。以来、竹中眞昭氏は毎年命日に法要を行い、彰元に学ぶ活動をしていることを披露しながら、

經典にある「劫濁」は時代の悪を指すが、今の時代は綺麗なのか？と問いかけ、イジメや自死、普天間基地の移転問題など社会的な問題を「仏教の教え」に基づいて、疑問の声をあげる必要があると強調した。

徹誠への評価

徹誠は西光寺に生まれた「いさほ」と結婚したことを縁として、大谷派で得度し僧籍を置いた。小幡智博氏は、植木等が『夢をくいつづけた男』を出版したことから徹誠の存在を知り、その生き方を「素敵だな」と共感したという。

しかし、徹誠は家族に辛い生活を強いたことや、「赤」や「共産黨員」として後ろ指を指されていた伝聞など、親族や門徒からの評判は決して良いものではなかつたというエピソードを披露した。

徹誠の言葉を受けて

宗教家が戦争を弁護するのは矛盾している。宗教家が戦争を弁護すると

は恐入った。元来宗教家は戦争に反対すべきものである。

この徹誠の言葉を大東氏が発題し、眞昭氏は「仏教の教えに基づいて戦争反対の声を出すべき」であると述べ、小幡氏は「宗教家や仏教家という事もそうだが、人間として戦争に反対すべき」という立場を忘れてはならないことを強調した。

このシンポジウムを踏まえて、本場の「社会貢献」とはなにか？という現代的課題を考えていきたい。



左より順に 筆者、大東仁氏、小幡智博氏、竹中眞昭氏

現代社会と
真宗教化

講義抄録

わたしの中のカルト

真宗大谷派僧侶・介護福祉士

小林 弘典氏
こばやし ひろのり

身近に耳目に触れる機会が増えたカルト教団。しかし「私には無関係だ」という感覚がどこかにありはしないだろうか。

二〇一八年五月十日、かつてカルト教団に入信していた経験を持つ小林弘典氏を講師としたカルト問題学習会（名古屋教区教化委員会主催）に参加し、自身の認識やあり方を問い直す機会を得た。

同朋社会の顕現に努めることを掲げる私たち真宗教団の歩みを確かめる一助となることを願い、抄録を掲載いたします。

幸せになりましたよ

私は二十年前までカルト教団に身を置いていました。団体名を伏せて勧誘が行われ、入信の際、事前に宗教団体だと説明を受けたわけでも、入会申込書に署名捺印をしたわけでもありません。気づけば熱心な信者の一人になっていた、というのが正直な感覚です。

大学に入學して間もないある日、駅の街頭で突然「アンケートをお願いします」と声を掛けられました。少し不審に思いましたが、相手が同い年の大学生だったことに親しみを感じ、サークルの勧誘のようなものかと思い、彼の話に耳を傾けてしまいました。

アンケートに答えた後、「自己啓発講座を紹介したい」と近くの教団施設に案内され、アドバイザーなる別の男性から一時間ほどの説明を受けました。あまりの熱

ことがありました。それを見ていた五歳の私は、怖くて身を固めて怯えていました。それからというもの、母が無理心中を図るのではないかと恐れ、ヒステリーを起す度に両手で耳を塞いでじっと息を潜めていました。私は子どもながらに、父のあつけない最期に人生の儂さを感じ、とても寂しくなりました。小学校を卒業する頃には「人はどうしてこの世に生まれ、何のために生きているのか」という問いを抱えるようになりました。

このような幼少期を過ごした私は「本当の幸せを手に入れた」と、アドバイザーの言葉にぐいぐい惹きつけられていきました。そして綿密な教育を受け、三カ月後には献金ノルマに基づいて次々に人を勧誘する熱心な信者になっていたのです。

自分は善で正義である

教団の説く幸せは、条件付きの幸せでした。カルト教団の特徴は「その人らしさ」を奪うことだと思えます。ほとんどの宗教はより善い方向への成長を促しますので、無条件に救うのではなく、「今のままのあなたでは駄目だ」という否定から始まります。ですから私も教団の教えに基づいた指示に従い、献金、勧誘、伝道といった活動に昼夜なく邁進しました。気付けば心身ともに病む中で、毎月百万円ほどの献金目標や、月初めに宣誓させた勧誘目標を果たすよう、後輩達に仕向けなければならぬ立場になっていました。それがとても辛く、ついには教団の活動ができなくなりました。教団幹部は

「自分の尻は自分で拭きなさい。教団から出て行きなさい」とボロボロの私を切り捨てました。

私は七年の歳月を全てカルト教団に捧げてきました。友人や親兄弟全てを勧誘した結果、あらゆる人間関係や生きていくための礎を失いました。あてもなく教団を出た私は、とある廃車置き場で一台の廃車を見つけて寒さや雨露を凌ぎ、一週間ほど、ただ寝ていました。飢えと渴きによって死の恐怖がよぎり、助けを求めて見知らぬ家の呼び鈴を押すと、九十歳くらいのお婆さんが現れ、水を一杯くださいました。それを一気に飲み干して一息ついた私は、初めて心の底から助けを求め、感謝の気持ちで湧いたことを感じました。今でもこのコップ一杯の水の味を時々思い出します。

その後、物乞い生活でたくさん人の真心に助けられ、七年間に及ぶ信仰生活を振り返るようになりました。カルト教団の信者は、自分たちだけが唯一の真理を知っており、世間の人々は救いを知らない可哀想な人々と見下していました。私も「可哀そうな人々に自分だけが知っている真理を伝えたい」という気持ちで勧誘をしていました。人は、自分自身の行為を善であり正義であると信じて疑いません。自己を正当化する道を歩んでいます。当時はそういう自分の姿が見えませんでした。

思考停止という心地よさ

マインドコントロールとは、心理学的

手法の応用で、その人の性格や心の反応を利用して特定の情報や感覚を刷り込むことです。特殊で怖い印象を受けますが、世間一般のセールスやコマーションにも活用されています。いかに誘導すれば誘い込めるか、どうやって献金する気にさせるか。宗教においてもマインドコントロール的な要素が溢れています。宗教音楽や、その教団特有の共通言語、あるいは密室での儀式や講義、グループワークなどがその例です。

社会復帰を目指した私を特に悩ませたのが、宗教音楽です。教団にはたくさん音楽や聖歌があり、それを利用して信者の士気を高め、信仰を鈍らせないように仕向けていくのです。離脱後でさえ、ふとした瞬間に音楽が頭の中に流れてくる。そして音楽に紐付けされた教義がフラッシュバックします。すると「今も悲しみの神が私を見ているのだ」と錯誤し、思考が止まってしまいます。そういった現象が根強く続き、苦しみました。

また教団特有の共通言語を徹底的に勉強させられました。時々試験が行われ、それを獲得する毎に神との絆が深まった感覚になりました。「誰も知らない言語や真理を自分だけが理解している」という優越感を抱くのです。するとそれに縛られ、その範疇でしか生きられない人間になっていきました。

印鑑や壺の販売にしても、最初は「神のためとはいえ、何故こんなことを？」と疑問に感じました。しかし寝食を共にし、厳しいノルマを共有している仲間が

「神様が頑張っている君を見て喜んでいらつしやるよ」と励まし、称賛してくれるのです。疑問や罪悪感是自己肯定感に打ち消され、居心地のいい関係の中で「これこそ正しい」と誇りさえ感じてくるのです。カルトはそういう心理を利用して、思考停止した信者を生み出します。私たち真宗教団にもそういった側面がないか、問わなければなりません。

愛されたいがゆえに

子どもにとつて、母親からの「あなたは正しくありなさい」という言葉は絶対です。生きていくために、正しさを追求しなければと自分に言い聞かせます。すると、何かにつけて正しいか間違いかを考えるようになり、それに執着します。

私の幼少期もそうでした。置かれた境遇の中で「いい子でありなさい。お父さんは死んだんだからお前がしっかりしなさい」と要求されました。心労が絶えない母親が笑って安心して過ごすことが、小学生の私が穏やかに生活する上で必要でしたし、「いい子」であることが母の励み

にならばと喜んで従いました。朝は牛乳配達、夜は新聞配達、学校から帰れば洗濯と夕食作り。同級生から「遊びに行こうよ」と誘われても、ぐっと我慢しました。時折母親にかけられる「お前はいい子だね」という言葉が私の全てであり、喜びだったからです。しかし、「いい子」の枠の中でしか生きられないことが、次第に葛藤となっていきました。そして生まれ育った境遇や母親を無自覚に憎むよう

になつていったのです。

私個人の問題として世の不条理や家庭環境への憎しみがありませんが、「ありのままの私を愛してほしい」という渴望がカルトに入る根本の動機でした。しかしそれは私だけではありませんでした。寝食を共にした当時の仲間たちは、大なり小なり家庭に問題を抱えており、教団や教祖は「愛されたい」という思いを叶えてくれると信じていたのです。

カルトとは、決して特殊な問題ではありません。承認欲求という渴望を抱えて善であろうとし、自分の存在意義を見失っている全ての人のの中に、その根はあるように思うのです。

(了)

小林弘典氏 略歴

1971年生まれ。7年間のカルトでの活動後、心身喪失の内にホームレスとなるが、社会復帰の過程で高齢者との生活や死別を通し、いのちの尊さを教えられて再び信仰に志を見出す。2015年度、2018年真宗大谷派教師補任。

現在は東京教区因速寺衆徒として法務に携わりながら福祉施設に勤務し、高齢者や障がい者に日々寄り添っている。



編集を終えて

カルト教団へ陥ることは、特定の人の素養や性質の問題によるのではなく、家庭環境や経済問題、人間関係などが複合的に絡み合っただけの問題である。そのような様々な社会問題の奥底にある「ありのままの私を認めてほしい」という承認欲求(渴望)が根本因子であり、近年、他者と繋がりあう喜びを満たすSNSによる信者獲得が増加していることから看取できる。それは社会(関係)を生きる誰もが持ち合わせている問題である。

それぞれの境遇に翻弄され「認めてほしい、愛されたい」と叫ぶ声に耳を塞ぎ、「それではだめだ」と善悪で裁き、切り捨てる私は、家庭で、宗門で、念仏の名の下に無自覚にカルト化しているのではないだろうか。宗祖が開顕された慶びとは何か。誰よりも「わかってほしい、助けてほしい」と叫んでいる私がいる。

(研究員 大河内真慈)

◇組・寺院などでカルト問題学習会をご希望の方、ご相談ください。

名古屋教区教化委員会
(名古屋教務所担当 岩田)
TEL:052-331-2468

◇カルト問題に関する相談窓口が開設されています。

真宗大谷派青少年センター
TEL:075-354-3440

現代社会と真宗教化 報告

第10回 自死者追悼法要

「いのちの日 いのちの時間」厳修

いのちに向き合う宗教者の会 主催
名古屋教区教化センター 後援

さる12月4日、自らのいのちを絶った方々を憶念し、僧俗ともにいのちの尊厳に向き合う「いのちの日 いのちの時間」が名古屋別院を会場に開催された。

今回で10回目となる同法要では、宗派を超えて集まった僧侶(いのちに向き合う宗教者の会)の呼びかけにより、教化センター後援、名古屋別院協力のもと、各宗派の特徴を生かした「法要」と遺族同士による「わかちあい」が行われた。

参拝者からは「世間が賑わうこの時期はいつも以上に辛くなる」「私だけがつらい思いをしているんじゃない」「何年経っても悲しみが癒えることのない私にとって、なくてはならない時間」「この時だけはあの人の生きた事実とじっくり向き合える」などの声が聞かれた。

INFORMATION

第13期研究生 募集

- 【対象】・満20歳以上の者(年齢の上限はありません)
・名古屋教区内の真宗大谷派寺院、教会に所属する者
(僧籍や教師資格の有無は問いません)
- 【募集人数】・15名程度
- 【任期】・2019年4月～2022年3月(3年間)
- 【日程】・月に1、2回程度(16:00～20:00頃まで)
- 【受付期間】・2019年1月8日(火)～2月28日(木)
- ※詳細は教区内寺院に発送の「研究生募集パンフレット」をご参照ください

教化センター日報

■2018年9月～11月

- 9月10日 研修業務「聖典研修⑦」(東館紹見氏)
11日 研究業務「平和展」学習会
- 10月2日 研究業務「自死遺族わかちあいの会」後援
3日 研究業務「平和展」学習会
23日 研究業務「平和展」公開学習会
24日 研究業務「平和展」学習会
- 11月12日 研修業務「聖典研修⑧」(東館紹見氏)
29日 研究業務「自死者追悼法要 リハーサル」後援
30日 大東仁氏出版記念講演会 後援

事務休暇・図書整理について

事務休暇

- ・2018年12月29日(土)～2019年1月7日(月)

図書整理

- ・実施期間：2019年1月28日(月)～2月8日(金)
- ※上記期間中は書籍、視聴覚教材の貸出を停止させていただきます。(館内閲覧は可)
- ※借り受け中の書籍、視聴覚教材は1月25日(金)までに返却をお願いいたします。

第30回平和展「仏教の社会活動-アジア太平洋戦争と大谷派-

【日時】2019年3月16日(土)～24日(日) 午前10時～午後6時
(予定) ※初日は午前11時から／最終日は午後5時まで

【会場】名古屋教務所1階 議事堂

【入場料】無 料

主催：名古屋教区教化センター

協力：名古屋教区教化委員会、名古屋別院

名古屋別院・春のお彼岸への参拝とともに、是非お立ち寄りください

平成21年以降、自死者の数は減少傾向にある。しかし自死遺族は毎年増え続けており、大切な人の突然の喪失、後悔や自責の念、周囲からの心ない言葉、地域社会からの孤立などに苦しむ遺族は、実は身近に大勢いる。それは年々この法要への参加者が微増していることから思い知らされる。彼らの悲しみ、憤り、苦しみの声の中に、日々自分さえよければいいと無関心でいる私に「それがあなたの喜びですか」と問う宗祖の声が聞こえる。

(研究員 おおこうち しんじ 大河内 真慈)



故人へ宛てた想いを真言宗僧侶がお焚きあげした

《雑感》

自坊の報恩講が近づき、木枯らしが吹き始める11月下旬。私は境内を美しく彩った紅葉に目を向ける余裕もなく、毎朝の梵鐘を突き、出かける前の1時間を落ち葉拾いに費やす。しかし次の日の朝には、再び境内全体を落ち葉が覆っている。私は虚しさを感じると同時に、自分の中で徐々に苛立ちが溢れてくるのを感じた。「こんな木が無ければ」と。

振り返れば、春には境内の満開の桜が心を和ませ、夏には例年にない猛暑の中、青く茂った木々が日陰を作り、心地よい風がお庫裡のお茶場に流れ、心を落ち着かせてくれた。

そんなことも忘れ、秋には落ち葉を拾いながら「こんな木が無ければ」と愚痴を吐く。その時の状況によって、笑顔になったり、渋い顔になったりと、ルーレットのように六道を経巡った1年だった。

(H²)

■教化センター

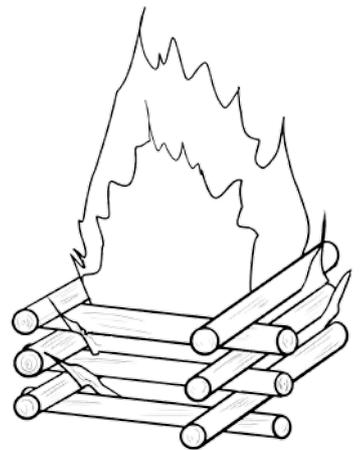
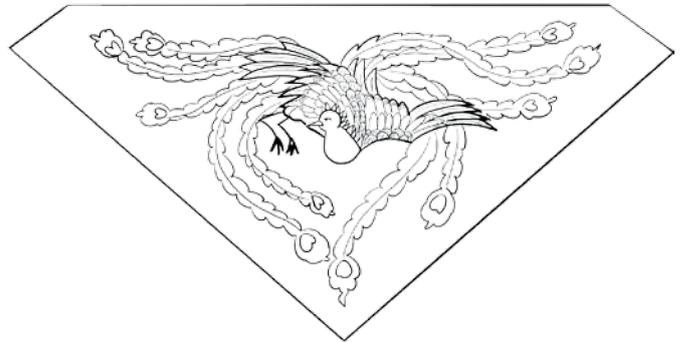
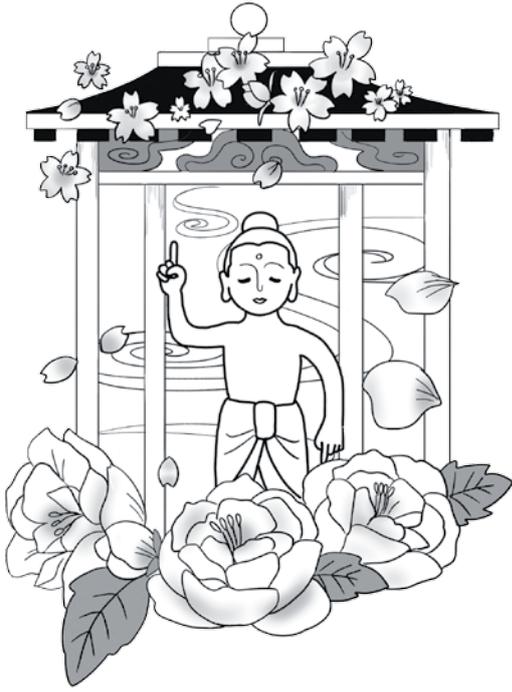
〈開館〉月～金曜日 10:00～21:00
(土曜日・日曜日・祝日休館 ※臨時休館あり)

〈貸し出し〉書籍・2週間、視聴覚・1週間

～お気軽にご来館ください～

イラストカット集

寺報やチラシなどにお使いください。



- データを希望される場合はお問い合わせください。
- 差支えなければ、イラストを使用された場合、教化センターまでお知らせいただくとともに、イラストを使用した印刷物などお寄せください。

※用途にあわせて、切り貼りなどしてご使用いただけます。
※あくまでもイメージです。ご了承の上お使いください。